

鐵道 東北

津輕鐵道株式会社

澁谷 房子（執行役員）

1. 津軽鉄道の概要

津軽鉄道は、本州の北端津軽半島を南北に走る総延長 20.7km の鉄道です。

夏は馬車、冬は馬橇しかない五所川原以北の原始的な交通状態をなんとか解決したいという想いと、津軽半島の産業・観光の開発と振興のため沿線住民の出資により 1927 年に会社が設立され、線路敷設のため幾多の難工事を乗り越えながらも 1930 年全線開業しました。

今年 11 月 13 日には、全線開業 77 周年を迎えます。

路線は、五所川原市・中泊町の 1 市 1 町にまたがり、津軽半島観光の入り口となっています。五所川原市には「夏祭り立佞武多(たちねぶた)」を常設する「立佞武多の館」、作家太宰治記念館「斜陽館」「津軽三味線会館」を有し多くの観光客で賑わっています。

また中泊町は豊富な魚介類がとれる漁場を有し、権現崎から竜飛崎までの海岸線は景勝に恵まれています。小泊 12 景、眺眺台展望所などからの景色は素晴らしく特に日本海に沈む落日は観る人の心に深い感銘を与えずにはおかない雄大さがあり、今後の観光地として期待されます。



図 1 沿線ガイド

津軽鉄道は、「ストーブ列車」を始めとして「風鈴列車」「ホテル列車」「鈴虫列車」等を運行させています。季節の風物詩としてマスコミに取り上げられることも多く、これらのイベント列車への乗車目当てに全国から多くの観光客が訪れています。また日本さくら名所百選にも選ばれている芦野公園の中を走る津軽鉄道は、桜の咲く時期には「桜のトンネ

ルを行く鉄道」としても多くの観光客を集めています。



図 2 雪原を走るストーブ列車

しかし、国鉄再建方策として、1984年2月のダイヤ改正時から国鉄五所川原駅の貨物取扱廃止の通告を受け、当社扱いの貨物輸送収入が皆無となってからは兼業を持たず旅客輸送における収入のみとなりました。その旅客も1974年の256万人をピークに少子化・過疎化・中心商店街の空洞化、郊外型大店舗の拡張による人の流れの変化により年々減少を続けています。

当社を利用する年間の乗客は372,187人で、その内訳は観光客を含めた一般の乗客が161,407人(43.4%)定期券を利用する通勤者が8,160人(2.2%)残り202,620人(54.4%)は通学生です。(2005年実績)五所川原市内に7つの高校があることから当鉄道を利用する高校生が多いのですが、少子化によるクラス数の減少・朝夕の自家用車での送迎などにより利用者は年々減少を続けています。また一般乗客のうち観光客以外は、五所川原市内にある病院に通う高齢者の方の利用が多く、車の運転が出来ない人にとっては重要な移動手段となっています。

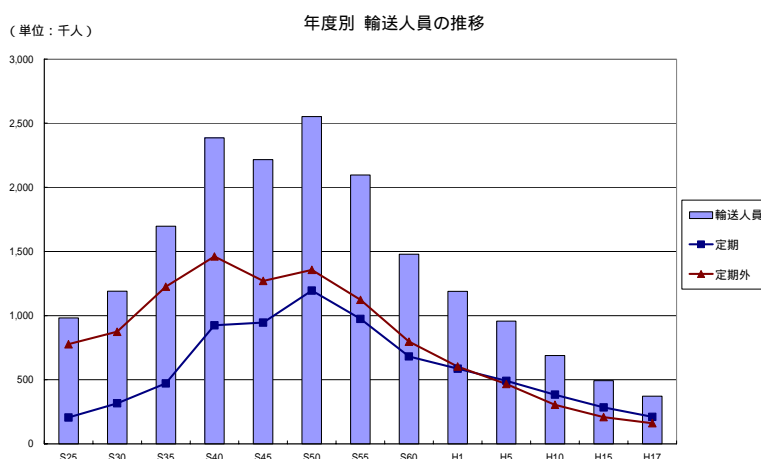


図 3 年度別輸送人員の推移

2. 「津軽鉄道を存続させる協議会」の活動

1981年津軽鉄道の重要な役割に鑑み、運行維持対策を協議して同線の存続を図る運動を

行い地域における民生の安定向上と発展に寄与することを目的に沿線の1市2町2村を役員として「津軽鉄道を存続させる協議会」が設立されました（1990年「津軽鉄道活性化協議会」に名称変更、現在は町村合併により1市1町と会社で組織）。その協議会の事業として沿線案内パンフレットの作成、鉄道活性化事業などに加え1994年からは列車が大好きな子供達に小さいころから「マイレール意識」を持って利用していただくため、沿線の小中学校が学校の行事として津軽鉄道を利用する場合、協議会が乗車運賃の全額を補助する「体験乗車」を実施しています。

その利用者数は、1年間で14校797人（2005年実績）を数え、体験乗車を終えた児童生徒さんからは、「鉄道の仕事の内容を知ることができた。」「乗車できて嬉しかった。」「汽車が大きく、長いので驚いた。」等たくさんの礼状をいただいています。

また、地域みんなで子どもを育てる新しい市民社会の構築を目指して設立された地元の「NPO法人子どもネットワーク・すてっぷ」が、津軽鉄道を利用したイベント「津鉄でGO!ミステリーツアー」を企画、車内でのクイズや沿線の芦野公園到着後は、公園内を走り回っての探検など参加した子供達は、普段乗車することがないためか車窓に流れる景色に見入ったり、その日一日を多いに楽しんでいました。

「子どもネットワーク・すてっぷ」は、これまで子どもの豊かな感受性とたくましい創造力を育むことを目的として活動してきた団体で、その団体が少子化により減少する乗客に歯止めをかけるため、小さい頃からの「マイレール意識」高揚のための活動して下さることは非常嬉しく頼もしく思っています。

3. 通学生への対応

当社にとって半数以上を占める利用客である通学生ですが、自家用車での送迎が増え続けています。列車運賃と車にかかる経費の比較、家の戸口から学校の戸口までの移動での便利性、車内での食事など時間の有効活用となるのですが、一方で、自家用車による送迎の家族の負担、また列車は単なる輸送手段ではなく、通学生同士、通学生と一般乗客の交流の場ともなっていると考えられます。列車下車後はそれぞれの高校に向かいますが、乗車駅での挨拶に始まり、車内では様々の情報交換が行われています。

少しでも列車利用に移行していただくための方策として、自家用車の送迎が朝のみ、または夕方みの場合が多く、回数券を利用する通学生に片道だけでも定期を購入していただくため2006年10月から「片道通学定期乗車券」の販売を開始いたしました。その割引率の優位性など周知方法の不備からまだ目に見えた増客とはなっておりませんが、今後は高校生によるワークショップなどの開催により、広く高校生の意見を聞く場を設け、津軽鉄道とのかかわりを持っていただけるように学校側に依頼をしております。これを機会に津軽鉄道は単なる移動手段ではなく、交流の場でもあることの認識を深めていただき、通学生自身・父兄・先生が将来の沿線地域のことについて考える場となって欲しいものです。

4. 「津軽鉄道サポーターズクラブ」の結成

2006年1月「津軽鉄道サポーターズクラブ」が結成されました。

会員は沿線住民を含め県内外から676名にのぼりました。「津軽鉄道の『鉄道軌道近代化整備費補助制度』を地方自治体に承認してもらえるよう応援しよう」ということがきっかけで、単なるファンクラブではなく、津軽鉄道沿線地域まで元気にしていくことを目標に活動して行こうという方針のもと、1年間様々な活動がなされました。

津軽鉄道に関する地方自治体との会議、「がんばれ津軽鉄道」フォーラム、セミナーの開催、「沿線資源発掘ワークショップ」を始め、映画「銀河鉄道の夜」上映会、ストーブ列車を題材にしたCD「雪酔（ゆきよい）」の発売を記念して「山木康世ライブ列車」の運行、ストーブ列車内での結婚披露宴、駅名標の寄贈等、どの事業も地元マスコミが好意的に取り上げてくれたため一般県民にもひろくPRできました。

イベント参加者は初めて津軽鉄道を利用する人が多く、サポーターズクラブ・スタッフの熱いもてなしを受け、次回のイベント開催を期待するとともに津軽鉄道の運営・存続に対し応援をしてくれるようになります。

今後の「津軽鉄道サポーターズクラブ」の活動は、「津軽鉄道沿線散策マップ」を作成し各駅に貼り出し、また携帯できるようにコピーして配布する予定で、津軽を訪れる観光客に隠れた質の高い地域資源を知ってもらうことにより、地域への経済効果が生まれ魅力を感じていただくと考えており、マップによる体験モデルツアーの実施、サポーターズクラブを中心とした「おもてなし隊」を組織し、地元住民お勤めの資源めぐりが予定されています。



図4 サポーターズクラブ・フォーラム

5. 地域との連携

さて、地域経済が不振な中、地元においては「道の駅」の産直を担当する方々の元気の良さを感じていました。特に地場の農産物を販売する農家の主婦のパワーには驚かされます。この方々の力を借りることが出来ないかと日頃から考えていました。そのような時、県の西北農林水産事務所主催による「つてつ（津鉄）に乗って農村探検」が開催され、沿線の遊休農地活用促進のため実際に津軽鉄道に乗車して車窓からの津軽平野の景観観察、閑地、遊休地、工作物の点検をしました。下車後の話し合いは事務所の意に反し、「昨晚はワクワクしてよく眠れなかった。」「嫁いできたときは列車の運行が農作業時の時計代わりであった。」「列車が走らない村から駅のある町へ嫁いで来て友人に自慢できた。」など津軽鉄道に対する思いや乗車しての感想が次々と飛び出しました。そして地域の重要な足である津軽鉄道の利用客が年々減少していることを知り、最近では鉄道に乗車することが少なくなったが、グループの会合や町内会の集まりなど機会を見つけて「これからは少なくとも年に1回は乗車しよう。」と呼び掛けていく事になりました。津軽鉄道を応援しながら地域も自分たちも元気になれる活動として、津軽鉄道と手を結び地域資源を活用した消費者交流を推進することを申し合わせ、会社及び津軽鉄道サポーターズクラブが実施するイベントへの参加を始めました。

会社から無人駅舎での農水産物の直売所開設を提案したところ、芦野公園で開催された桜祭り期間中の駅舎での販売を初めとして、「ホタル列車」「ビール列車」運行時の終点駅舎でのおにぎり弁当・おでん・漬物・海産物販売、「津鉄にゆられて結婚を祝う会」の企画に賛同していただき、地元食材を活用しての料理提供、地元で栽培した花での車内飾り付けなど様々な活動を行っていただきました。

2006年11月には「津鉄を元気に、地域を元気に、自分を元気に」を合言葉に津軽鉄道を舞台とした直売活動に取り組み、消費者との交流や地産地消を推進することを目的として「津鉄応援直売会」を設立させました。具体的な活動として、12月から運行されたストープ列車内の団体客に車内販売を始め、人と人との交流を大切に、津軽鉄道の名物お母さんとなるよう笑顔で県外の観光客をもてなし、さらに津軽鉄道名物となる農産物加工品の商品化をめざしています。

会員は60歳から80歳代の方々に、約30名の加入申し込みがありました。ただ高齢の方も多く動く車内での販売を苦手とする方は、座布団を手づくりし、駅待合室のイス用にと寄贈して下さったり、駅舎周辺の草取りなどできる範囲での協力をいただいております。「冬場家に閉じこもりがちであったが、今年は列車に乗っているいろいろな土地の人と話が出来ました。」「また会いに来ますっていわれましたよ。」「あまり売れなかったけど、民謡唄って、踊って。とても楽しかった。」など、「津鉄応援直売会」会員の笑顔がありました。初めての試みを地元マスコミも大きく取り上げ、それがまた会員の励みともなり合言葉どおり津軽鉄道も元気をいただきました。

今後は、無人駅を活用し駅ごとに特色のある直売店の開設、公民館的要素を持った子供

からお年寄りまでみんなが集う場所として、無人駅が有効的に使用されることを望んでおります。また沿線にあるブルーベリー農園での摘み取り体験、アスパラ収穫体験、地元で収穫されたそばを利用してそば打ち体験など、鉄道を利用し最寄り駅まで移動し、その後農業体験していただくイベントの開催を「津鉄応援直売会」会員と共に計画しています。

このイベントを通して、消費者と農家の主婦との交流から伝統料理の伝授、漬物など野菜の保存方法など高齢者から教えていただくことが多く、そういった機会を設けることにより高齢者がますます元気になっています。



図 5 津鉄応援直売会 車内販売風景

地域からの津軽鉄道利用客を増やそうとする支援は「津鉄応援直売会」に止まらず、2007年3月からは沿線の観光関連施設との連携が始まりました。五所川原市内にある宿泊施設、観光施設、その観光施設を結ぶ津軽鉄道が「燃える奥津軽」という名称の会を立ち上げ、「奥津軽周遊丸特プラン」を企画しました。

この企画のため、オリジナルのパンフレットとゴム印を作成しました。パンフレットを持って各施設を回っていただき、その施設の商品購入・入場料金支払い・列車の乗車券を購入することで独自のゴム印を押してもらうことができ、1個ごとに加盟宿泊施設の宿泊料金が400円割引(最高5ヶ所、宿泊料金2,000円が割引)になるという特典付のスタンプラリー形式の観光企画です。

目的施設のみの観光でいらした方も他の施設を知り、そこを回るにより宿泊料が安くなるという面白い企画ではありますが、当地においでになる前に宿泊先などを予約されている観光客が多い中で、如何にこの企画を知っていただくが課題となっています。2007年3月10日から一時期(夏祭り期間中などの繁忙期)を除く10月31日までの期間限定商品ですが、旅行会社からの問い合わせもあり、既に90名を超える申し込みをいただきました。

た。加盟施設は、津軽富士見ランドホテル（宿泊）津軽金山焼（陶芸体験・展示ギャラリー）立佞武多の館（指定管理者 NPO 法人プロジェクト五所川原倶楽部）津軽三味線会館・斜陽館（指定管理者 NPO 法人かなぎ元気倶楽部）津軽鉄道株式会社と異業種による 5 者が企画した商品であることに地元でも注目し、当会はさらに食事処、土産品店など範囲を広げ観光客に魅力ある商品に仕上げていきたいと考えています。



図 6 パンフレット（奥津軽周遊プラン）

6. 終わりに

少子高齢化・人口減少時代にあって、地方鉄道事業者は歯止めの効かない乗客の減少に苦しい経営を余儀なくされております。会社独自の経営努力を続けることはもちろんのことではありますが、今後も「津軽鉄道サポーターズクラブ」と共にセミナー等開催により津軽鉄道に対する理解を深めていただき、またイベント開催などの支援をいただきながら新たな乗客確保に努めていきたいと思っております。

さらに「津鉄応援直売会」の応援に見られるように元気な高齢者の方々とともに、地域が元気になる活動を推進し、地域全体が活性化されるためのきっかけを津軽鉄道が担えれば、津軽鉄道を単なる人・物の移動手段としての生活交通として捉えるのではなく津軽の文化的資産として、また「燃える奥津軽」の企画にあるように地域の重要な観光資源として、いわゆる観光用のツールとしての位置付けの元に今後もその役割を発揮していきたいと考えております。